

ポストドク時代を振り返って



若 者

石川 史太郎*

Looking back my postdoc period

Key Words : Postdoc, research, Germany, Japan

1. はじめに

この度平成19年6月より、現在の大阪大学大学院工学研究科で採用して頂き、勤め始めました。それまで私は、3年と2ヶ月の間、ドイツのベルリンにあるポールドルーデ固体電子工学研究所で、ポストドクターとして働かせてもらっていました。今回この記事を執筆する機会を頂くにあたり、せっかく過ごすことの出来たその3年間を振り返ってみたいと思います。そして、その間のポストドク生活は、どの場面を思い出しても微笑んでしまうような非常に楽しいものであったことを、できれば、自分自身思い起こして感じられるように書き留められればと思います。またそれと同時に、その間感じたことを踏まえ、今後なるべく大切なことを見逃したりすることの無いよう、これからの生活への心構えとして考えていることなども書いてみたいと思います。

2. 生活のペース、仕事のペース

ドイツに滞在してなんといっても一番大きな違いとして感じた事が、生活・仕事のペースがゆっくりしていた、ということでした。最初に研究所でグループに配属になった時にグループリーダーから言われたことは、・毎日夕方5時になったら帰りなさい。・金曜日には2時半には帰りなさい。でした。当初は冗談かと思っていたのですが、実際に6時に

はほとんど人影が無くなり、7時に残っているのは日本人とスペイン人の同僚のみ、というのがいつもの風景でした。また、休暇の希望は非常に大切でしっかり尊重する、とうことも大きく異なる部分でした。休みたい時にいつでも来週から一ヶ月休める、といった具合です。自分がいつでもリフレッシュできるという意味では、本当に良かったです。ただ、多くの装置を受け持っている技官の人が毎年一ヶ月以上固めて休むので、その間は大勢の人の実験が停滞する、ということもありました。生活の場においては、たとえば町の商店でも、閉店15分前には片づけを始めて、入ってくるお客さんは断ったり、また、重要な公的手続きでも、担当者の人が休みだと一ヶ月待たないとだめなことがあったり、という感じでした。どこに行っても、自分はこのペースだし、相手は相手のペース、という感じでした。求めることも出来ないかわりに求められることも少ないので、自分自身の実作業はかなり少なかったように思います。ポストドクという比較的責任の問われない立場であったこともありますが、何かに追われる、ということが非常に少なかったと思います。結果として、普段はリラックスした気分で過ごすことが多い生活でした。そのような時間的、気分的余裕から、旅行やバレエ、音楽といったヨーロッパの娯楽・文化に触れる機会を多く作れたことは、この3年間の生活を非常に幅の広いものにしてくれました。それまで全く興味がなかった自分が、夏の到来を待ち望んだり、あるダンサーの演目や、ベートーベンの第何番を楽しみにしている、というのは、楽しい自分自身の変化でした。

3. 職場の環境：専門性

これは大きく所属する機関によって異なると思うので日本の大学とヨーロッパの研究機関の違い、と



*Fumitaro ISHIKAWA

1977年3月生
北海道大学大学院工学研究科 博士後期過程(2004年)
現在：大阪大学大学院，工学研究科，
原子分子イオン制御理工学センター，
電気電子情報工学専攻，助教，工学博士，
化合物半導体結晶成長
TEL：06-6879-7767
FAX：06-6879-7753
E-mail：ishikawa@eei.eng.osaka-u.ac.jp

いった大それたものではないと思うのですが、ある程度雰囲気の違いくらいは反映していると思います。以下に書くように、大きく異なる(と、僕は感じました。)研究に対する二つの姿勢を体験できたことは、強く考えさせられ、また、面白いものでした。

研究環境で大きな違いを感じたのは、それぞれの人の研究に携わるスタイルが、それまで所属した日本の大学とは大きく異なっていたことでした。大雑把に言うと、これは先輩の受け売りなのですが、日本では“試料が個人に所属する”のに対して、ドイツの研究所では“手段が個人に所属する”という感じだったと思っています。例えば、僕は半導体の結晶成長を専門にしていますので、試料である結晶を作ります。その後、光学特性、構造特性、電気特性、といろいろな測定を行い、その結晶の特性の評価を行います。少々極端に言うと、日本の大学にいた頃は、全ての測定に対して、自分で習って、なるべく自分自身で自分の責任のもとに、あれもやろう、これもやろうと測定を行っていました。初めから終わりまで、できる限りは人任せの部分は少ないほうがいい、という気持ちで研究を行っていました。一方ドイツの研究所では、様々な測定手段や実験手法、それぞれに専門家の科学者の方々がいて、それらに関しては大きく判断を委ねていました。発光特性、X線構造解析、電気特性評価などなど、それぞれに長年研究を特化して続けてこられた方々がいて、その方たちの知識・経験を作った試料に当てはめる、という感じでした。

研究所にはそのように長い間一定の評価手法や研究方法に携わってこられた方が多くおり、そのような方達から教えてもらう様々な事は、非常にためになり、面白いものでした。どの職員にも一人部屋か二人部屋が与えられていて、部屋のドアさえ空いていけば気軽に声をかけていい環境でしたので、わからない事の専門科の人がいれば、すぐに話を聞きに行っていました。前章で書いたような時間に余裕のある雰囲気だったこともあり、訪ねたときは、こちらが恐縮するくらいじっくり時間をかけていろいろ教えてもらったり、問題を一緒に考えたりしてもらえました。振り返ってみると、こういった時間は本当に貴重だったと思います。こっちは発光特性のスペシャリストがいて、こっちは光吸収、ラマン効果、X線構造解析、結晶成長、、、と、今思

えば、研究所自体が、何だか大きな、生きた教科書のようなものだったように思えてきます。それぞれの研究者の人たちが、本を構成する各章という感じ

4. 振り返って

研究に関して思い起こすと、恵まれた環境に甘えてしまう事が多かったかなと反省しています。前章で書いたような研究所の環境では、何かに困った場合、専門科の方に質問に行くのとたちどころに問題が解決するということが多々ありました。これはその場合は非常に助かるのですが、助けてくれた人がいないと何も出来ない、ということも数多く引き起こしてしまいました。

あとドイツでよく感じたのは、もう少し日本のこと、身近なことをしっかり知っておかなくては、と思ったことでしょうか。同僚と飲みに行ったりすると、必ず日本のことを何がしか聞かれました。また内容が驚くほど詳しいものであることが多く、村上春樹の文章・人間性について、宮本武蔵の人生観について、安藤忠雄の建築について、といったものでした。登場人物・関わった専門家や時代背景まで踏まえて、ギリシャ人の同僚や、レストランでとりに偶然座った近所のドイツ人の老人が突然質問してきましたが、そこで何も答えられないような時は、いつもなんとも情けない気分になりました。振り返ると、そのような身近なものを知ろうとしない僕の態度が、せっかく経験したドイツ生活も、実の少ないものにしてしまった気がしてなりません。

ポストク時代の研究も、いろいろ触れることの出来た文化も、大変貴重なものでした。ただそれらも大事に扱わないと、身近なはずだった日本の知識のように、気付かないうちにどこかからこぼれ落ちてしまいそうです。また誰かに尋ねられても何も答えられないことのないように、研究も、普段の生活もひとつひとつ大切に心に留め、これからもそうしていきたいと思います。そしてそのような時間を、面白く、幸せなものに今感じさせてくれているポストク時代に、大感謝しています。

5. 最後に

最後になりましたが、執筆する機会を与えてくださいました、大阪大学大学院工学研究科、杉本隆先

生ならびに「生産と技術」の関係者の方々に感謝致します。また、これまで仕事、勉強、生活、あらゆる面でお世話になった方々、特に、決定するまでは夢にも思っていなかった、海外でのポストク実現に

あたりお世話になった皆様、本当にありがとうございました。

